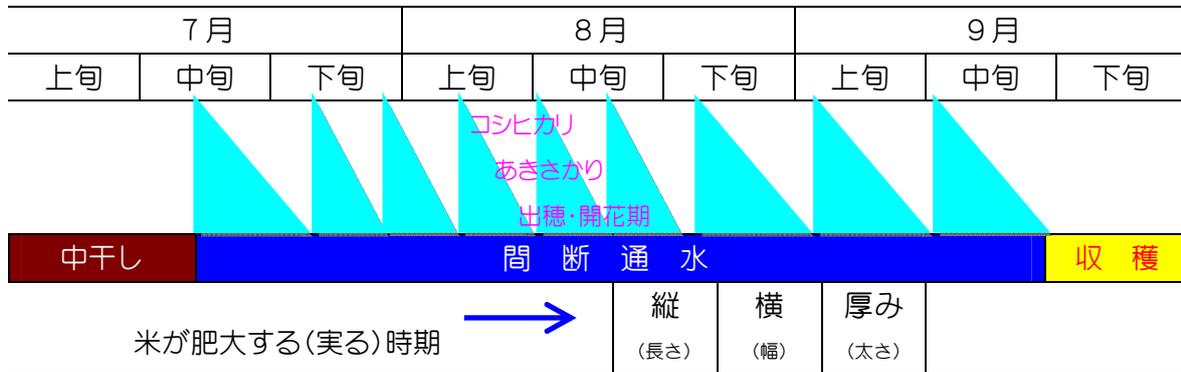


登熟期の水管理

■ 出穂後の水管理はグレードアップ最大の山場 ■

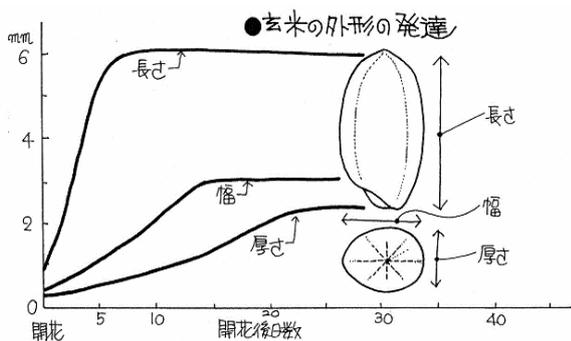
北陸地方は平年7月24日頃に梅雨明けし、その後は暑い日が続くことが想定されます。この時期、何故、間断通水なのか、どうして収穫直前までする必要があるのであるのかを認識して出穂後の水管理を行ってください。



稲の丈が伸びるようになる節間伸長期には新しい根の発生はほとんど無くなり、根の活力も弱まってきます。

一方、穂ばらみ期から出穂・開花期は最も水を必要とする時期であり、この時期には土壌中の水分が不足しないように心がけ、そのためにも幼穂形成期以降は、決して強い田干しは行わないようにしましょう。遅くまで田んぼに水を入れておくとコンバインの収穫作業が難しくなるので落水を早める人が多いですが、早く落水すると米粒の肥大が悪く収量が伸びません。それだけでなく、根の活力が急速に弱まり、未熟粒や胴割粒の増加につながります。

田面の足型に水が残る程度には水分を保ち、刈取予定の2日~3日前ごろまでは、土壌が急激に乾燥しないようにしてください。



玄米の大きさが決まるまでは、出穂してから約4週間かかります。概ね最初の1週間で開花・受精、次の1週間で玄米の長さが決まり、その次の1週間で玄米の幅が決まります。そして最後の1週間で厚みが決まるため、早く落水した田んぼの米は最後の厚みが十分でなく、粒厚の薄い米になってしまいます。

玄米の大きさが決まった後、ゆっくり成熟に向かいますが、細い分けつや遅れて出てきた穂はそれよりも後にずれ込みます。したがって、少なくとも穂が出てから35日程度は落水しないようにしましょう。

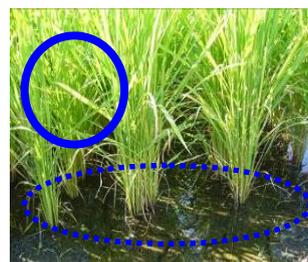
しかし、35日間湛水状態にしているわけではなく、出穂後は間断通水を心がけましょう。

間断通水で地固めをしながら玄米を太らせ、台風など強い風が吹くときだけ水を十分にやるようにしてください。

コシヒカリは平坦地で8月6日頃が出穂期と予想されます。幼穂形成期以降は、田面が深くひび割れる（田んぼの土が白くなる）ような田干しは厳禁です。

出穂後、猛暑日や熱帯夜が続くと、白未熟粒や胴割粒の発生が懸念されますので、間断通水を頻繁に行いましょう。又、出穂期から登熟期にかけてのフェーンは褐変粉の多発要因となります。このとき、稲体から水分が急激に蒸散し、水分不足によって葉先が焼けるなど稲が衰弱します。フェーン現象が予想される時は予め湛水するか、入水して地温の上昇を防ぎ、稲体と根を守ってやると変色米が少なくなります。

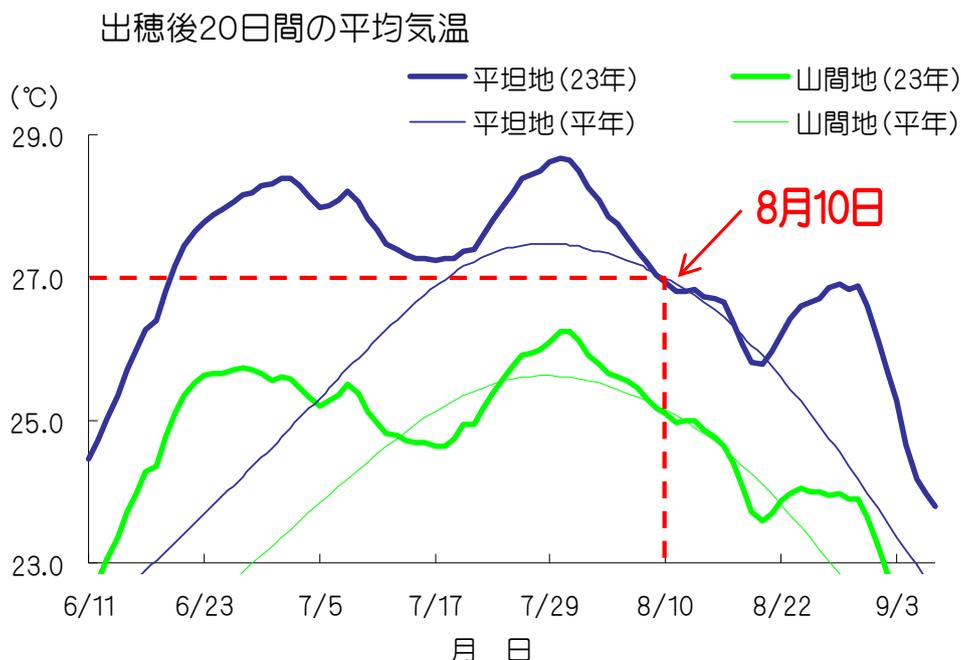
出穂期～成熟期は最も水分を必要とする時期で、間断通水は2～3日おきが基本ですが、高温時の稲体活力が消耗する気象条件化では、毎日でも通水して下さい。



間断通水のやり方は、土壌条件やその時の天候によってさまざまですが、水を入れたり、抜いたりしながら稲の根に必要な水分や酸素を補給することが大切です。

毎日の水管理が難しい場合は、2～3cmに湛水し、その水がなくなる前に水を補充する（入水を繰り返す）管理を行きましょう。

白未熟粒の発生は登熟前半の高温により多くなり、その影響が最も高い時期は出穂～出穂後20日頃。この期間の平均気温が27℃以上になると多発します。



出穂期～成熟期までの登熟期間（8月上旬～9月中旬）が高温（日平均気温27℃以上）に経過すると、白未熟粒および胴割粒の発生が助長されるので間断通水の間隔を狭めるなど、気象や圃場条件に応じた水管理を実施しましょう。